

在宅の重症心身障害児が、療育施設と結んだインターネットテレビ電話を通じて、自宅にしながら施設の子供たちや職員と交流できる市立稚内病院の試みが効果を挙げ始めている。障害児を対象にした遠隔教育支援は全国でも珍しく、1日の大半を自宅のベッドで過ごす子供のコミュニケーション能力の向上が期待される。

「これはリンゴ？ それともバナナ？」。稚内市の通所療育施設「ヒラソル」の職員、奥山寿恵さん（37）がテレビ画面越しに問いかける。全身の筋力が低下するウェルドニッヒ・ホフマン病で同市内の自宅で人工呼吸器を付けて生活する小倉翠桜ちゃん（5）が、それを見て、目を大きく開いて反応した。

ヒラソルの側では、画面に翠桜ちゃんが映ると、施設に通う2～6歳の子供たちが「こんにちは」と呼びかけ、紙芝居やゲームが始まった。画面に映ったカードのイラストに翠桜ちゃんがうなずく。奥山さんは「初めは動きが少なかったが、今はYESの時にうなずき、NOは顔をしかめるまで意思表示できるようになった」と話す。

道北の広大なエリアに暮らす障害児の支援態勢を強化しようと、市内稚内病院と重症心身障害者施設

の北海道療育園（旭川市）が昨年11月から今年3月まで、翠桜ちゃん宅を対象に厚生労働省のモデル事業としてテレビ電話を設置。発達支援として効果が出始めていることから、事業が終了した現在もこのシステムを活用している。

北海道療育園によると、上川、宗谷、留萌管内では約160人の重症心身障害児者が自宅で暮らす、この地域をカバーする専門の施設は同園しかないため、通所が難しい児童もいる。

翠桜ちゃん宅と施設を結ぶテレビ電話は月2回で、各回30分程度。一般的に在宅では外部との交流が少なく刺激や体験も限られるが、市内稚内病院小児科で翠桜ちゃんを担当する引地明大医師は「テレビ電話の活用でコミュニケーション能力の向上が期待できる」。母親の美和さん（43）も「普通なら同世代の子となかなか友達になれないが、テレビ電話を通じて少しずつ友達の輪に入れたと思う」と手応えを感じている。

北海道療育園の木曾賢一支援課長は「稚内の先進事例を参考に、今後、地域で重症の障害児を継続的に支援できる態勢を考えたい」と話している。

（北海道新聞・札幌（夕刊） 2014年7月19日）